

〈研究ノート〉

共同研究〈諸文化圏・諸言語圏における呪い・穢れ・占い・迷信〉

Hoshi's magic of Korea

韓国の法師の呪術

村上祥子

要旨

法師の呪術は共同研究テーマの中で、呪いあるいは迷信の範疇としてとらえることができる。法師が実際の現場で行う呪術とは経文と設経であり、どのように祭祀を行うのか、経文にはどのようなものがあり、どのような効果を持つのか、どのように唱えられているのか、また祭場を飾る設経とは、具体的にどのようなものかを現場の調査を踏まえて考察した。

法師の出現は古く高麗時代の盲僧に連なる存在であるといわれ、現在は目が見える法師により継承されている。韓国で一般的に行われる巫堂による祭祀は、歌と舞により 請神 ⇒ 娛神 ⇒ 送神の構造で行われ、現世の招福を願うものである。それに対し、法師の祭祀は、経文を唱えることと、設経という祭場に取り付ける紙を切った造形により 請神 ⇒ 脅神 ⇒ 送神を行うことで、厄災を払い招福を願うことである。その構造に大きな違いがある。また巫堂は降神巫と世襲巫に分けることができるが、法師は学習によりその技術を修得することから学習巫として理解されている。

法師の経文や設経は口承が主であり、師匠によりそれぞれの特徴を有しており、一貫性はない。法師の祭祀は現在では座経といわれるが、実際に行われる経文についてその性質を概観した。また設経は三か所に天禁・内禁・外禁と称され取り付けられる。各設経の意味と、目的をその造形を通して考察した。

目には見えない法師の呪術は、耳を通して経文として、目を通して設経としてその効果を発揮するものである。

キーワード：法師・菩薩・座経・設経・経文

1. はじめに

呪術とは目に見えない超自然を認めた人間が認識し、その力を操ろうとするものである。これらは宗教的な行為に利用されてきた。ここでは韓国忠清道一帯に散見できる法師の行う座経で、どのような方法で呪術が行われているのかを考察する。特に設経という切り紙に注目したのは、日本の伝承切り紙に通じるものが韓国にもあるのかを考える機会があり、法師の祭祀で祭場を飾る切り紙の設経を知った。日本でも古来から折符や護符などがあり、また祭場を飾る伝承切り紙がある。これらは祈りや願いを具現化したもので、法師の設経は大掛かりであり一種の祭具であるといえる。日本と同様にそこに込められる思いは、超自然を信じる「呪術」の一種である。設経は法師が制作し、同じく呪術的効力を持つ経文を通してその効果を最大限に発揮することで、祭主の招福を願うのである。以来、現場調査を続けてきた。巫堂の祭祀が様々な色合いで祭壇を飾るのは違い、設経は白い紙を切って作られることが多いのは、日本の伝承切り紙と同じである。祭祀の場の祈りとその効果を表現する時に神聖をイメージする白が使われるといえる。韓国では法師の祭祀以外に白い切り紙だけで祭場全体を飾ることはなく、設経の造形が法師の呪術が見えるものとして表現していると考えられる。実際に設経がどのように創られ、目に見えない力の存在をどのように表現しているのかを知るために、ここで取り上げることにした。同じく経文も願いを音として表現する法師の呪術の実行のためのものであると理解できる。

巫堂の祭祀は歌と舞で、請神 ⇒ 娛神 ⇒ 送神という神を招いて歓待することで招福を願うものである。一方、法師の祭祀は、請神 ⇒ 脅神 ⇒ 送神という厄災を及ぼす悪神悪鬼を経文と、紙で作る設経で捉え、追い払うことで招福を願うものであり、その方法において大きく違う。

法師の行う祭祀については「座るクッ⁽¹⁾」「座経」「両班クッ」「踊らないクッ」「巫儀」などの名称があるが、ここでは座経という筆者が調査した趙富元法師の言葉に従うことにする。法師という名称は、判数^{ハンヌ}が起源であり、これまで経文者・読経匠・経者・経客・経師・誦経・法師・経師などや、占いをする特徴から卜術・福師・術客・占師・問福者・占い師などと呼ばれてきた⁽²⁾。半数は盲人が中心であったが、今の法師は盲人ではない点を除けば大きく異なる点はない⁽³⁾。これらの名称は法師が行う呪術の目的を表していると考えるが、ここでは法師という呼称を使用することにする。また経文は巫経といわれる場合もあるが、ここでは経文とする。

韓国では朝鮮時代に儒教の規範で政治を行い、巫堂の行う祭祀は淫祀として何度も禁止されたが、実際は途絶えることはなかった。それは儒教が規範は教えたが、宗教としての信仰の面を補うことが出来なかったからである。ここでは同じように淫祀とされた法師の呪術である経文と設経について、現場で行われた祭祀を参考としながら論じる。

現代社会では宗教的な行為が減少していく中で「心のよりどころ」を何に求めるのかということは、大きな問題として今を生きる人々に突き付けられている。長い歴史の中で、かつて人はどのような信仰の中で生きてきたのか、またそれが現代にもみられることを知ることは、今後の宗教のあり方を考える上でも必要なことである。

2. 研究史

朝鮮半島における巫俗の研究は、植民地時代から始まる。村山智順が調査した『朝鮮の巫覡』に盲僧に関しての言及があり⁽⁴⁾、各地域の巫儀についての説明の中に忠清北道の読経巫儀は紙片を結びつけた枝と、悪鬼を祓う鬼神とで壺に悪鬼を閉じ込め、土中に埋めるという説明がある⁽⁵⁾。また経文に関して三十一篇余りが集録されているが、口伝により伝えられるも

のがほとんどであり、文字により伝えられるものも書写したもので経題も経文も雑多で整理されてないことを指摘している⁽⁶⁾。

続いて秋葉隆の『踊る巫と踊らぬ巫⁽⁷⁾』は盲人巫覡と彼らが主催した座るクツの実相を知ることができる点に価値がある。李能和は『朝鮮巫俗考⁽⁸⁾』で座経研究の端初を開き、盲人巫覡による座経に言及しており、韓国道教の流れを追跡しながら盲人巫覡が高麗時代の道僧であると指摘した。座経と関連する資料と典拠を提供している点で非常に価値があると評価される。

本格的な研究は1960年代からであるが、孫晋泰「盲覡考⁽⁹⁾」から始まった。盲僧を盲覡と命名して、盲覡は高麗時代から予言と占ト、そして座るクツを主催した事実と、朝鮮初期には国家から従8品の奉事職と正9品の副奉事、従9品の参奉職を除拜し、彼らを積極的に受容したことを明らかにした。続いて徐大錫の「経巫考⁽¹⁰⁾」では、巫堂を職能別に分類し、クツ巫と経巫、そして雑巫に分けて経巫を中心として座るクツと立つクツの実行形態、規模、様相などを比較した。座るクツを韓国巫俗に中国の馳驅儀の様式を収容して、道教・仏教の思想を混合した新たな形態のクツであると考えた。

金榮振は「パンス考⁽¹¹⁾」で男性の巫堂名称を調べ、孫晋泰が究明した高麗時代の盲覡を根拠にして、職能は預言、占ト、読経であるという事実を確認した。彼らをパンスと命名し、パンスの性格と盲人巫覡との関係を明らかにした。ラ・インジョンは「読経の名称考察⁽¹²⁾」で‘設位説経’が作作的に創られた造語であると批判するために読経について言及している文献の用例を細かく調べた。以上の論文は通史的な観点から経客と巫堂の性向を比較すると同時に、経客の役割を追跡した結果のものであるといえる。

一方、現場に注目した論議もなされた。金榮振は「忠清北道の巫俗研究⁽¹³⁾」で、忠清道で躍する巫堂たちの大部分が学習巫であるという事実

を統計から明らかにし、彼らの巫服、巫具、巫経などを紹介した。また座るクツの類型を祈福祭儀、救病祭儀、降神祭儀、慰霊祭儀に分類して、各演行の様相を詳細に取り扱った。オ・ムンソンは「忠清道の座るクツ研究—忠南 扶余地域を中心として⁽¹⁴⁾」で、忠南扶余域の経客と巫堂の関係、神堂の形成、祭次の構成などを調べ、座経の核心的な伝承地が忠道であると力説した。同じくイ・ピルヨンは「忠清地方の狂クツ」と「忠清地域の家庭信仰の類型と性格」で病クツと安澤クツの演行を現場理論的な立場から取り扱い⁽¹⁵⁾、続いて『鶏龍山クツ堂の研究』で鶏龍山のクツ堂の形成と類型及び法師の組織、そして彼らが所有している巫経をひとつひとつ提示した。

その他、李圭昌は『巫経考⁽¹⁶⁾』で全南地域の資料を中心として巫経が道教と仏教の影響を受け形成されたと主張した。ファン・ルシは「江原道地域の読経の現況と宗教的な特徴についての研究⁽¹⁷⁾」で病クツを中心として座るクツの種類と内容を調べると共に、クツの神格及び関連資料を立つクツと比較した。

しかし、座経は口承形態に一貫性がなく、祭場を取り巻く様々な模様の設経などから、模擬行為として穰災など直接的であり強い呪術行為が複合的に絡まっている。そして病クツや狂クツあるいは厄払いのような呪術が強調される祭祀と、救病系列の祭祀が存在するかという、安澤クツや告祀のような祈福系列のクツ、神明クツのような降神系列のクツ、魂クツやチノギクツのような慰霊系列のクツも存在する。また簡単な形式や、内容の粗悪な呪文も存在するが、自然の位置を構造化した五行や仏教の真言を受容している一方、呪術の効果を高くするために辟兵や星占の原理まで受容している⁽¹⁸⁾。

「従って資料の実態を歪曲した“座るクツは経客が巫経を読む単純な形態のクツである”“座るクツは神将を呼んで邪鬼を威喝する一種の厄払いである”“巫経は粗雑な呪文である”という式の誤解を解かなければなら

ない。これは解放後に展開された韓国巫俗及び韓国巫歌の研究において‘立つタツと巫歌中心の伝統性の付加’という既存の偏狭な視角を克服する代案でもある⁽¹⁹⁾」という見解が出されている。

これまでの研究から法師については、かつては全国的にみられたが、現在では忠清道に残っているだけである。先に述べたように孫晋泰が「盲僧」は高麗時代の資料に見られると指摘しており、その伝統が古いものであることがうかがわれる。一方、巫堂には降神巫と世襲巫がある。降神巫とは本人が望まなくとも神病を患い、原因の分からない症状から抜け出すために巫堂になる場合である。世襲巫とは巫業をする家系に生まれ、家業を継いだ場合である。法師になった者に話を聞くと、神病的な症状を語る者が多く、はっきりとした降神の経験がなくとも特別な力があると自身は信じている。しかも家族の中に巫堂とならなかつたとしても、その兆候が見られる者がいる場合が多い。そして法師の場合、自らに神降しをすることはなく、設経と経文は師匠から習うことになる。両方とも習得するには長い修行の時間が必要であり、法師は学習巫といえる⁽²⁰⁾。

3. 法師と菩薩

巫堂の行う祭祀は、祖先神をもてなし満足させて送ることを目的として行われる。そうすれば生きている子孫に幸せを招くことが出来るからである。しかし法師の儀礼は、疫災をもたらす悪鬼を脅かして捉え、排除するために行われる祭祀である。そのために経文の力と、設経で法師の呪術力を高め、一体となったものが座経であると理解できる。座経の現場では巫堂は菩薩と称される。ここでは菩薩の名称を使うことにする。

法師に神々が憑依することはないので、かつては座経が行われる村には竿掴みという神降しをする竿を持つ受け手がおり、そこに憑依させていたが、時代の変化により都会化した村ではそれを担う者がいなくなった。そ

のことが一層、法師と菩薩の関係を密接にしたといえる。菩薩と法師は悪鬼を捉えるときには、菩薩が竿掴みの役をし、両者の協力で壺に悪鬼を閉じ込める。現在の座経は、菩薩との協力関係によって成り立っている。従って、巫堂（菩薩）の祭祀に法師の悪鬼を排除する方法が加わったと解釈できる。菩薩は問題を抱える依頼者と面談して、原因を占いで明らかにし、護符で解決できない場合に、どのような祭祀を行うのかを決定する。祭祀の期日が決まると、法師に連絡して招聘する。本来の法師がする祭祀は、法師と竿掴み役とで行っていたが、時代の状況変化により法師の役割は菩薩の依頼で経文をあげ、祭場の祭具の制作をするという補助的な存在となった⁽²¹⁾。

以上のように、依頼者から菩薩へ、菩薩から法師への連絡が来て初めて祭祀の場が設けられることで、法師は主導的立場から、補助的立場へと変化し、菩薩からの依頼を待つしかないのが現状である。祭祀での設経は法師が準備するが、これは時間がかかり座経の内容や規模により変わるし、場合により簡素化される。

4. 法師の呪術

法師の呪術とはどのような意味を持ち、どのように行われるのかを知るため、実際の座経を調査した結果を交えながら考察してみたい⁽²²⁾。上記で述べたように法師の呪術は、大きく分けて二つである。それは経文と設経である。この二つで法師の力を強め、悪鬼を捉え、疫災を祓う。

経文は師匠である法師により変わるが、誰でも知っていなければならない基本的な経文は玉樞経・玉甲経・寄門経・天地八陽経である。これらを組み合わせる座経の目的に沿って唱える。

調査した座経（1999年3月16日）では、遂邪壇と靈駕極楽壇が作られた。遂邪壇には、その場に招く神将名を朱書きした短冊と、紙を様々な形

に切ったものが設営された。法師はこれを設位設陣と称するという。遂邪壇は内禁・天禁・外禁に分かれており、方位は重要でなく八卦による鬼門がその日どの位置にあたるのが重要であるという。祭壇の高さは祭祀により考慮されるが、神将の力を示すものなのでなるべく高くするという。霊駕極楽壇は、若くして独身のまま死亡した男女を結婚させあの世に送る儀礼である。独身のまま亡くなると一番怖い鬼神となると言われ、現世に生きる人に悪い影響を与えると考えられている。ここでは法師の脅神と菩薩の娛神が同時に行われたことを意味している。

4-1. 経文

祭祀の場で唱えられる経文は、経力を言葉で示すことである。座経で読まれる経文の種類は、玉樞経・玉匣経・千手経・天地八陽経・山神経・龍王経など数十に及ぶ。法師たちの力量と師匠から習ったことの差によって法師が知る経文の種類も差がある。重要ないくつかだけを知っている場合もある⁽²³⁾。

経文は口傳もされているが、文書による習得も多く、経文の本が発行されている場合もあり、全国のどの地域でも同じ経文が口誦されている。ただし祝願・徳談・解冤詞などの経文は固定されているものではなく、一般の人々が容易に分かる内容である⁽²⁴⁾。

安相敬（2006）によれば、忠清道で伝承される経文の資料や研究のテキストは、座経の経文を包括したものと考えられる。問題は伝承の主題として多くの法師は体系的な教育を受けていない高齢者であり、漢文の文語体で構成されている経文の意味をすでに忘れ去っていることである。また現場での経験では、90%に至る法師が座経の辭説⁽²⁵⁾的な意味は度外視して、各篇のあらましや傾向だけを知っている状態で、単純に暗記しているに過ぎないことである⁽²⁶⁾。

結局、各経文の内容は正確性に欠けるという事実である。同じく安相敬

(2006) は漢文で伝承されている正確と思われる資料をまとめ、二十六の資料からその類型と座経時に使われる名称をどの法師が使用しているかを調べている⁽²⁷⁾。

経文の名称も各法師によって違う場合も見受けられると考えられる。筆者が調査した一例に2008年9月8日 病クツ (安澤クツ)⁽²⁸⁾ からみると、まずは菩薩による山神祭から始まり、山神祝言で不浄を払い、病氣 (眠れない、気力がない) を治して欲しいことを神に告げる。すなわち、この日行われる祭祀の目的をまずは述べる。次に法師が経文を唱えるが、その順番は次の通りである。

① 初経 → 太乙保身経 → 不浄経 → 神明告祝願 → 山神
山王経 → 大監祝願 → 病者祝願 → 堂山経 → 龍王経

これが終わると、供えてある水と酒を取り換え、ここから法師の経文が本格的に始まる。

② 初経 → 太乙保身経 → 12神明祝願 → 祖上祝願 → 六十甲字解冤経が唱えられるが、この部分がこの日の核心的な経文となる。

終わると、菩薩による祖先神の神降しが始まり、祭主の悪いところを指し示し、口寄せもする。そして祭主はござに巻かれ、全身を打ちつけられて、体内にいる悪鬼を退治すると、祭主は立ち去り、最後に法師が

③ 内殿祝辞 (客床祝願) → 安心経 (安慰安定経) を唱えることで、この座経は終わる。

座経の内容を簡単に説明すると、座経を挙げることを伝え、祭祀の場の神に対してまずは経文をあげ、次にこの日に請奉する神や神将に対して、悪鬼を捉え、消滅させるための経文をとるが、神統を羅列することから始まり、神兵の結陣、八門大蔵経、鬼神の捉擒などが続き、鬼神に対する攻撃的な内容を持つ。最後に神や神将に感謝を込めて送り出すという構造になっている。

座教における多様な経文の分類をすると、内容と機能により遂邪経・家

神奉安経・祝願経に分けることが出来る。逐邪経は神を呼び、鬼神を追い払ったり捕まえて消滅させるために読まれる経文で、鬼神を威喝して怒鳴り神将・神兵に命令して、神陣を立て鬼神を捕まえ結託して処置する内容が中心である。家神奉安経は成主祖先など家庭守護神を奉安する経で、祝願経を読む前と読んだ後に読まれる経である。祝願経は神将祝願経文と家神祝願経文に分けられるが、神将祝願文は神将の威力を賞賛し、神将の活躍を励ます内容で、逐邪経と一緒に読まれる⁽²⁹⁾。

ここに招かれる神将たちの名称を見ると、それ自体がすでに天文や五行の規則が含まれていることがわかる。即ち貧狼、巨門、禄存、文曲、廉貞、武曲、破軍、左補、右弼などは古代擬似天文学の観点から吉星とされている。次に九星〔北斗七星及び左・右補弼星〕であり、神将の名称にすでに‘天文の規則’が内在している。だから吉星の神助を応用して不浄的な存在を除こうとする事実を推し量ることが出来る。五方と五色を組み合わせた神将が陰陽数あるいは五行と関係している所に降臨している⁽³⁰⁾。

安相敬（2006）は座経が韓国伝統に基盤を置きながらも、より強力な呪力を確保するための手段として中国古代呪術を収容して発展したという立場から座経の形成と発展を推測した。そしてまた韓国伝統信仰に基盤がある神格と道教の諸神と同一の位置から祈願の対象としての地位を確保していると述べている⁽³¹⁾。

法師本来の目的である逐邪経は、仏経の形式を模倣した偽経であり、逐邪経にはトルゴル経のように呪文の羅列で一貫しているものもある。経文は長くなく、連続で呪力を祈り、雑鬼の侵奪を祓い、天氣に猛威を振るい、憂患から病者を救うことの内容である⁽³²⁾ という。

神に対する認識と呪術を強調する方法は降神巫と同じでありながら、経文で悪鬼を排除するという方法は、降神巫や世襲巫とは違う様相を見せている。このような法師の呪術性は、七世紀以後から本格的になり、古代時代には咀呪の厭勝〔*お守り〕を主として全域にまたがり、蔓延し、法師

の呪術行為は国王が乗り出し、徹底して崇仰したことを確認した⁽³³⁾ という。

4-2. 設経

設経とはこの場に招く神霊の名前を書いた短冊と、神霊の姿や、悪い鬼神を防ぎ、捉えて動かないようにする形を表した切り紙でできている。設経制作も法師により差がある。

調査した座経は、1999年3月16日に、韓国忠清南道泰安郡所遠面法山里696-1の趙富元法師の自宅で行なわれたもので、設経がいかに詳細に祭祀の目的を現わしているかを考察する⁽³⁴⁾。この日の設経は大きく分けて遂邪壇と霊駕極楽壇である。

〔1〕 遂邪壇の設経図

遂邪壇の設経図の取り付けは、内禁と天禁と外禁に設けられる。内禁とは部屋の中に設けられ、天禁とは内禁前の天井の中央から八方向に広げて吊るすものであり、外禁とは雑鬼が安宅に入ってくるのを防ぐために屋根の庇の下につけるものである。その一つひとつにどのような設経が設けられたのかを詳細に見ることにする。

1) 内禁

部屋の一方の壁に朱砂で書かれた神将位目を貼る。何枚の神将位目を貼るのかは、祭りの種類・性格・期間により決定する。この日は、太上老君玉皇上帝と両天尊を中心に配して十二位の大王と神将の位目を貼った。

奉請 太上老君玉皇上帝之位

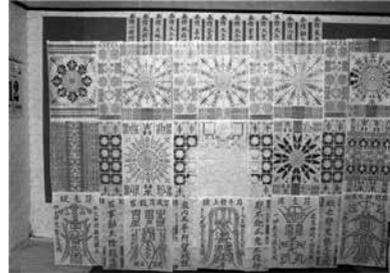
奉請 九天應元雷聲普化天尊之位

奉請 北斗證明大聖天尊之位

奉請 素車白馬大元帥大神将下降



写真① 内禁 神将位目と祭壇



写真② 設経

- 奉請 大聖北斗七元星君下降
- 奉請 名山大川山王神将下降
- 奉請 水府四海龍王神将下降
- 奉請 天上天下捉鬼神将下降
- 奉請 天上地府逐鬼神将下降
- 奉請 八道相生奇門神将下降
- 奉請 動土禁徐五岳山王下降
- 奉請 天地造花風雲神将下降
- 奉請 玉府執甲劍舞神将下降
- 奉請 一劍除神兵馬大王下降
- 奉請 東方甲乙青龍神将下降

これらは道教的な神を中心としているが、神々をこの場に呼び、奉り請願することを表している。

その前に四段になる壇が作られた。祭壇の各段には米と果物が供えられ、一番上には容器に入れられた米にロウソクを立て、白糸が掛けられる。向かって左側には、神将竿が米を入れた容器に立てられ、そこに水が供えられる。神将竿は、長さ 80cm のクヌギに白い紙を切ったものを巻き

つけて作られている。

その前には祭壇を隠すように設経2枚と護符1枚を1連として5連の設経が吊るされる。向かって左からまとめると以下のようになる。

- ① 上下に鉄網の模様があり、中央には陣法的一种である円中央陣を形どり、雑鬼を生け捕りにした姿、囚鬼の漢字（鬼を獄に閉じ込めるという意味）、符籙本（甞の刃をかたどった）の模様がある。

次に両端に百殺（すべての祟り）⁽³⁵⁾と‘禁’の漢字があり、生け捕られた鬼神の姿が各4個あり、真ん中に囚鬼の文字が左右対称にある。最後に符籙がある。白馬大神将符で、右に素車白馬大元帥大神将、左に下降来臨擁護家中とあり、白馬が引く白い馬車に乗った白馬大元帥が天から降りてきてこの場に臨み、家内のすべての人々を包み保護するという意味がある。

- ② 上下に鉄網の模様、中央には円中央陣、周りに人皇大帝という漢字と刀の先を表わす模様が丸くなっている。

次に上下に禁邪の漢字と鉄網の模様があり、中央に円中央陣とそれを8人の神将が丸く取り囲んでいる。四隅に符籙本が模ってある。最後に遂鬼符がある。これは雑鬼を追い払い護符である。右に遂鬼神将降臨来臨、左に一切悪鬼遂鬼消滅とある。

- ③ 上下に鉄網の模様、円中央陣とそれを取り囲んで天皇大帝の文字が8個と四隅に符籙本の模様がある。

次に四君子、菊・梅・竹・蘭を四隅に配し、中央の花の上に壽福、左右に康寧の文字がある。

最後に壇上禮斗符がある。祭壇に奉った神霊にお礼を申し上げる符籙である。右に補處日光菩薩、中央には28の星座と3万3千の神霊が鬼神を捉えるという内容である。左は左補處日光菩薩の文字がある。

- ④ 上下に鉄網の模様があり、円中央陣の周りに地皇大帝の文字が8個ある。その間には刀と槍の模様がある。

次に邪禁邪の文字があり、円中央陣を取り囲むように三奇と八門の文字が8個ずつある。三奇とは宇宙の奥妙な気運であり、八門は気運が通う門であり、ここでは陣法の一つである八門陣を意味している。最後に百殺消滅符がある。‘百’は‘すべてのもの’を表わし、‘殺’は不吉なことや鬼神が身体にとりついているから、この護符は五行の良くない厄運に対するもので、やっってはならないことをしたために起きる厄をすべて消滅させるためのものである。

- ⑤ 上下に鉄網の模様があり、円中央陣を8人の神将が取り囲んでおり、その間には刀の先がある。

次に中央に縦に金・木・水・火・土・五行陣の文字があり、左右に鉄網の模様がある。最後は捉鬼符である。鬼神を捕まえる符籍であるが、右に捉鬼神将擁護壇上、左に妖亡邪鬼能之消滅の文字がある。これは鬼神を捕まえる神将が祭壇を守り、保護し、要望する邪鬼（悪鬼）たちをうまく消滅させるという意味である。

これらの間には「妖亡邪鬼能之消滅」、「邪不能正鬼不侵神」、「家内太平平所望成就」、「百事動土徐殺消滅」と書かれたものがある。そしてその前に鉄網といわれる網目に切った紙をいっぱい広げて、悪鬼を捕まえる。両脇には円錐形の鉄網がある。

以上、座経の目的を切り紙で表し、悪鬼を捉え排除するための装置である設経図は、なによりも精密に作られており、造形美に優れているのに驚くが、模様として決められたものが伝承されているのではなく、各法師の創意工夫により作りだされるものである。座経を行なうに際して、経文と同じほど重要である設経は、座経をより効果的に目に見える形として提示する信仰の心と願いを伝える造形として作り上げられているといえる。

設経図には、円中央陣が多くあるのが目につく。趙富元法師の説明によれば、鬼神が難しい円の形を嫌いなためであるという。形は、「人間の心の深層を無意識のうちに表わすが、そればかりではなく、人間の精神や文化

をも表わす。心は個人の内に固有に存在するが、それが民族や時代の傾向を集め、人間として生きる決意と方向性をもつときに、人間精神を形づくっていく。そして人間精神は、時代や状況と対応する文化をつくりあげていくのである⁽³⁶⁾。」形は人の心を表わすものであるだけでなく、それは人の精神や文化をも映しだし、時には、民族や時代の特徴も映しだす。設経図に多く円中央陣が使われるのは、円が「人間の根源的なもの、あるいは人間の誕生以前の神や宇宙を含めた元



写真③ 設経 鉄網

型心理と関係がある⁽³⁷⁾」形であり、人の根本的な無意識の世界を映し出し、円中央陣は、円の中央を中心として広がる円錐螺旋（等差螺旋）として、「中心から拡大へと、遠心から中心へと無限に生から死へ、死から生へと変転、循環していく無限大の運動がある⁽³⁸⁾」形として、韓国の信仰の基本理念ともいえる生から死へ、死から生への願望を形として表現しているのではないかと考える。今日の韓国でも日常生活のなかで、円の造形を以外に多く見つけ出すことができるのは、このような信仰心理と無関係ではないのかもしれない。

一番下にある符籙は、鬼神の侵入を防ぎ、退散させるものである。符籙は、韓国で古くから伝わる鬼神の撃退法である⁽³⁹⁾。設経は災いをもたらす鬼神が嫌いなものを主として造形として作り、飾ることによって鬼神に対峙しようとする気持が強く表現されるものであるといえる。これは、「説経は鬼神を追い払う形式で、鬼神をなだめて送る巫堂のクツとは根本的な差異がある⁽⁴⁰⁾」といわれるように、巫堂の行なうクツの精神構造とは違ったところから出発している祭礼である。

部屋中にめぐらされた設経図の前にも紙で作られた鉄網の様子は、鬼神を逃さないように、捕らえ閉じ込める為のもので、座経の根本目的が逐邪にあり、鉄網は設位設陣に欠かせない核心的な要素である。鉄網は、平たく作られた一般鉄網と、円錐形の鉄網に分かれており、機能によってまたいくつかの種類に分けられる。囚鬼鉄網は、形は円錐形の鉄網と同じであり、鬼神を捉え、閉じ込めるものである。

2) 天禁

天禁とは、逐邪壇前方の天井に直接八方に広げて細長い鉄網を伸ばし、貼り付けられる。八方に伸びたところを円形になるよう細長い鉄網で3重に繋ぐ。天井に直接、日本の神社にある天蓋を取り付けたようにみえるが、これを八陣禁絲という。八方の鉄網の先に各神将の名前が朱砂で書かれ吊り下げられる。

その位目は、

- 艮方休門神将
- 震方驚門神将
- 巽方傷門神将
- 離方杜門神将
- 坤方開門神将
- 兌方休門神将
- 乾方死門神将
- 坎方景門神将

である。

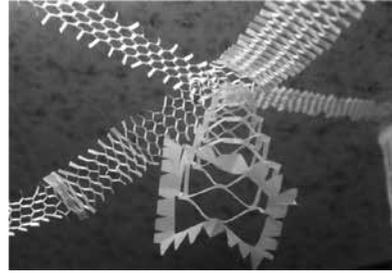
各方位と門の種類はその日の干支により変化する。また五方（東・西・南・北・中央）に、ここを担当する神霊の名前を朱砂で書いて吊るす⁽⁴¹⁾。

東は「東方甲乙青龍神将下降」

西は「西方庚申白虎神将下降」



写真④ 天禁



写真⑤ 天禁の鉄網

南は「南方丙丁朱雀神将下降」

北は「北方壬癸玄武神将下降」

中央は「中央戊己句陣騰蛇黄帝神将」

五方の神将位目の書かれている短冊の両端は、上に向かって斜めの切り込みがあるが、これは神将の威厳を表わすものであり、雑鬼を怖がらせるためのものであるという。下には五行の思想から各方位の色に合わせた青龍は青、朱雀は赤、玄武は黒、黄帝は黄の護札をつける。ただ西の白虎の白は目立たないので、西方浄土を行き来する神霊である戸口別星⁽⁴²⁾の色である緑をつける。これは飾りとして神将の威厳を引き立たせ祭壇を華やかにし、位目が風に吹かれられないように重しにもなる実質的な機能をも持つ。

八陣禁絲には円錐形の鉄網を吊るし、雑鬼たちに休む所と思わせ、実は捕らえるために誘導する雑鬼依支網を吊るす。以上、天禁は八方を守る神将与五方の神将の威力により鬼神を捕らえ、鉄網に閉じこめるためのものである。

3) 外禁

外禁は、雑鬼たちが安宅に入ってくるのを止めるために設置するもの

で、本来は屋根の庇の下につけられるが、この日は家の外にある塀の上につけられた。二十八宿鉄網をはって、これに二十八宿（二十八の星座に相当する神霊⁽⁴³⁾）の名前を朱砂で書き吊るすが、以下の通りである。

1 角星	光一到遂鬼消滅	2 亢星	光一到遂鬼消滅
3 氏星	光一到遂鬼消滅	4 房星	光一到遂鬼消滅
5 心星	光一到遂鬼消滅	6 尾星	光一到遂鬼消滅
7 箕星	光一到遂鬼消滅	8 斗星	光一到遂鬼消滅
9 牛星	光一到遂鬼消滅	10 女星	光一到遂鬼消滅
11 虚星	光一到遂鬼消滅	12 危星	光一到遂鬼消滅
13 室星	光一到遂鬼消滅	14 壁星	光一到遂鬼消滅
15 奎星	光一到遂鬼消滅	16 婁星	光一到遂鬼消滅
17 胃星	光一到遂鬼消滅	18 昂星	光一到遂鬼消滅
19 畢星	光一到遂鬼消滅	20 觜星	光一到遂鬼消滅
21 參星	光一到遂鬼消滅	22 井星	光一到遂鬼消滅
23 鬼星	光一到遂鬼消滅	24 柳星	光一到遂鬼消滅
25 星星	光一到遂鬼消滅	26 張星	光一到遂鬼消滅
27 翼星	光一到遂鬼消滅	28 軫星	光一到遂鬼消滅

また門の入口には随陪床を用意し、その上に「上中下序各等随陪神」と書かれた紙を貼る。随陪神は神将より格の下がる部下に当たる神霊であり、随陪床はこの神霊をもてなす膳である。

以上のように遂邪壇は、主として鬼神を捉え追放する目的のために作られている。その威力を発揮するために奉請する神や神将は赤い文字で書いて攻撃性を現わしている。これは巫堂のクツがさまざまな神の降神を祈願し、迎えた神を楽しませるために歌や踊りをしてまた送り出すのとは違う構造で行なわれるものであり、巫堂クツが女性的であるとしたら、座経は



写真⑥ 外禁



写真⑦ 霊駕壇

攻撃的で男性的であるといえる。

〔2〕 霊駕極楽壇の設経図

祖先の霊駕や亡者の冤恨を極楽へと薦度する儀礼である。この日は、若くして自殺したふたりを結婚させ極楽浄土に引導する儀礼が行なわれた。霊駕極楽壇の飾りは、天井に「西方浄土極楽世界南無阿弥陀仏」と墨で書かれた紙が横向きに貼られる。これは西方浄土の極楽世界に、祖先の霊駕と亡者の怨魂が薦度することを阿弥陀仏にお願いするという意味である。玄関前の部屋に設けられた祭壇のうしろに三連の設経図が掛けられた。設経図は、極楽を象徴する仏の姿、観世音菩薩・阿弥陀仏・釈迦牟尼仏・地藏菩薩を中心として北極星・北斗七星・雲・月・蓮の花・松・竹・鶴・カゲロウ・搭・ロウソク・蝶・ホトトギス・祖先の霊駕としておじいさんとおばあさんの姿などがみられる。道教では北極星と北斗七星は貧富俸禄と生死禍福をはじめとする全てのことを支配していると信じられていたが⁽⁴⁴⁾、星に対する信仰は、仏教や巫俗と習合して広く信仰されている。蓮の花は仏の姿とともに描かれているが、蓮の花は仏教では大慈悲を象徴している⁽⁴⁵⁾。雲、月、松、竹、鶴は、長寿を願う十長生として信仰されているものであり、これは韓国の自然崇拜のうえに中国の神仙思想が結びついた独特の信仰であるといえる⁽⁴⁶⁾。特に竹と松は不浄の接近を常緑の威



写真⑧ 霊をあの世界に導く道

力により防ごうという信仰から禁忌祓浄の場に用いられることが多い⁽⁴⁷⁾。蝶は喜びの象徴であり、夏を象徴し、また夫婦の琴瑟のよさを象徴した⁽⁴⁸⁾ のでその姿の華麗さとともに女性の装飾品に今日も多く使われている。ホトトギスの鳴き声は怨み

を残したような鳴き声をするため怨恨を象徴するといわれているという⁽⁴⁹⁾。

霊駕壇には死んだ二人の代わりに人形が置かれ、造花、お供え物と神竿が置かれている。ここから玄関を通り、門までまっすぐに両脇を亡者護慰網が掛けられ、造花で飾られており、あの世への道を象徴する。亡者護慰網とは、亡者の靈魂を雑鬼に邪魔されず、極楽に薦度させるために引導する鉄網である。

遂邪壇が鬼神を捕り抑え、閉じ込め封じることを目的とし、敵にたいして戦いを挑むことを意味し制作されるのに比べ、霊駕極楽壇は、この世に怨恨を残し死んだ者の平安を願い極楽浄土に導くためのものであり、設経図の制作の目的もまったく違う意味で作られる。本来、法師の座経の目的は、遂邪壇における鬼神に対峙する姿勢であったのが、近年になり、変化をしたとみられる。

「座るクツの伝統があった大田にも 1945 年 8 月 15 日の解放と、1950 年 6 月 25 日の朝鮮戦争を経て、他の地域の巫俗から多くの影響を受けた。特にソウル、京畿道地域の立つクツの影響を強く受けた⁽⁵⁰⁾」といわれるように、忠清道の座経は、巫堂との関わりが密接となり、接触することで、互いに吸収、受容という変化が起こり、霊駕極楽壇が新たに座経の中に組み入れられたのではないかと考える。

以上から悪鬼を捉えるための設経は、幾重にも悪鬼を脅かし、捉えるこ

とを繊細な図で表現しており、積極的な呪術を行うことを表現している。またこれらの設経が示す意味から考えると、道教的な思想の上に成り立っていると考えられる。

「驅儺儀と相通じた法師の呪術行為は、剪紙の形態を取り入れた祭具として、韓国の巫経が独立的に形成・発展したとは見られない。中国の古代呪術の受容により巫経が発展したという立場から巫経に内在している中国の古代呪術の痕跡を追跡できる⁽⁵¹⁾」という。また「辟兵呪術は主に神獣や天神の姿をもつ器物の呪力として戦禍を退治し、又は相対する敵として災いを及ぼそうとする積極的な呪術である。辟兵呪術は春秋時代の文化であり、特に禳災巫経で辟兵呪術を収容⁽⁵²⁾」したと考えられるという。

5. おわりに

法師の行う祭祀が本来は盲僧から出発しているとするのが、大勢である。しかし設経を伴うこの祭祀は、盲目である僧がどのように紙を切り、祭祀の現場を装飾したのかは明らかでない。盲僧の中にはわずかに目が見える者も存在しており、盲僧を手伝っていたという資料もあり、村山智順が残した現場の写真からは、簡単に紙を切ったものとはいえ設経が見られる。祭祀の場には、その目的を可視化するための装置が必要なのはどの宗教も同じである。今日、設経と称されている紙を切った祭具と、神や神将、方位に対する名称、星名などは漢字で書かれる。これは学習を伴い、盲僧の手助けをする者がおり、そこから盲僧の祭祀が一般の目の見える者へと伝承したと考えることもできる。装飾がどのような名称として伝承され、いつから設経と称されるようになったのか、はっきりとはしない。

法師の行う祭祀が、巫堂のクツと大きく違うのは、祭祀の場に招く神と神将による攻撃性であり、悪鬼と戦うためにやって来る。そのための経文と設経が法師の呪術である。以上、実際に法師の呪術とはどのようなもの

かを考察した。経文は大きく人間に対するものと、神や神将に対するものとに分けられる。特に強調されるのは、神や神将を招き、その力で悪鬼を捉え、消滅させるためのものである。設経はそれを目に見える形として表現する祭具である。

座経がどのように継承され変化をしてきたのかは、もう少し研究が進まないと難しい点もあるが、明らかに巫俗とは違う。それが現在では菩薩と法師の協力関係なしでは成立しないという本来の形は失われつつあるが、できるだけ現代の座経の姿を正確に記録し、法師の呪術の実態を伝えることは、韓国の信仰について知るうえで重要であると考えられる。

《注》

- (1) クッ (ㄱ) とは祭祀の意味
- (2) オ・ムンソン (1994) 『忠清道 座るクッ研究』 漢陽大学 大学院 修士論文 p.10
- (3) オ・ムンソン 前掲書 p.11
- (4) 村山智順 (昭和七年三月) 『朝鮮の巫覡』 朝鮮総督府 p.161
この本には附圖写真があり、当時の盲覡の祈祷と題する写真が掲載されている。ここに漢字と思われる短冊形のもの、紙を切った物が両脇に吊るされており、また祭壇に並べられた器に紙垂のついた棒が立てられている。当時の様子が見て取れる。
- (5) 村山智順 前掲書 pp.314~315 「樹枝に細長く切りたる紙片を数十條結び下げたるもの、及び壺、鬼神の三種を用意し、二名の祈祷者中一名は太鼓及び鐘を打ち鳴らしながら読経し、暫時他の一名の手に乗せる鬼神を前記樹木をもって壺中に追い込み、之を厳封して土中に埋め以て悪神を封じたりとするものなり」
- (6) 村山智順 前掲書 pp.618~619
- (7) 秋葉隆 (昭6) 「踊る巫と踊らぬ巫」 (宗教研究新第九巻・) 『韓国巫俗論集』 pp.207~221
- (8) 李能和 (1976) 『朝鮮巫俗考』 白鹿出版社
- (9) 孫晋泰 (1981) 「盲覡考」 『孫鎮泰先生全集』 2 太学社
- (10) 徐大錫 (1973) 「経巫考」 『韓国文化人類学』 1 輯 韓国文化人類学会
- (11) 金榮振 (1983) 「パンス考」 『民俗語文論叢』 啓明大学出版部

- (12) ラ・インジョン (2002) 「読経の名称考察」『語文研究』40 輯 韓国語文研究学会
- (13) 金榮振 (1976) 「忠清北道の巫俗研究」『論文集』10 輯 清州大学校
- (14) オ・ムンソン (1994) 『忠清道 座るクツ研究』漢陽大学 大学院 修士論文 pp.5~6
- (15) イ・ビルヨン (1999) 「忠清地方の狂クツ」『シャーマニズム研究』1 輯 韓国シャーマニズム学会 「忠清地域の家庭信仰の類型と性格」『シャーマニズム研究』3 輯 韓国シャーマニズム学会
- (16) 李圭昌 (1994) 「巫経」『全羅民俗論巧』集文堂
- (17) ファン・ルシ (2000) 「江原道地域の読経の現況と宗教的な特徴についての研究」『シャーマニズム研究』3 輯 韓国シャーマニズム学会
- (18) 安相敬 (2006) 『座るクツ研究』忠北大学校 博士論文 p.5
- (19) オ・ムンソン 『忠清道 座るクツ研究』漢陽大学 大学院 修士論文 pp.5~6
- (20) 永井彰子 (2002) 「盲僧集団の歴史の変遷」『日韓盲僧の社会史』葦書房 p.153~
- (21) オ・ムンソン 前掲書 p.5
- (22) 1999年3月16日に韓国忠清南道泰安郡所遠面にある趙富元法師の自宅で行われた行なわれた座経は、大主（祭家の家長）李慶悦（57歳）さんの事業の成功と、祭主（祭家の女主人）ユ・ファンニョル（54歳）の病気の治癒のために逐邪壇と、大主の姪（兄の娘）であるイ・スンオク（22歳）さんが3年前に自殺したが、同じく若くして自殺したキム・ジョンホさん（趙富元法師の知人）との霊魂結婚式を挙げ、亡者の無念を晴らし、極楽に薦度させるための霊駕極楽壇のふたつが準備された。これ以降、何度か他の法師の現場に行ったが、規模として一番大きいのが趙富元法師の現場であったので、これを例としてここでは見ることにする。
- (23) オ・ムンソン 前掲書 p.4
- (24) 安相敬 (2006) 『座るクツ 巫経 研究』忠北大学 国語国文学科 博士論文) p.35
- (25) 辭説とは歌やパンソリの時の合間をつなぐ語り
- (26) 安相敬 前掲書 p.10
- (27) 安相敬 前掲書 p.11 ここで設経の項目で調査資料とした趙富元法師は「八門大陣経」と「祖上経」が含まれている
- (28) 韓徳法師 巫業（法師）大田無形文化財第2号座るクツ（説経）保有者候補 天人菩薩（61歳）・菩薩1名。病クツの依頼が多い。クツ堂は忠南

公州市 反浦面鳳谷1区 サン472-1。祭主は柳ソクシン氏（83歳）で、症状は眠れない、気力がない。原因は菩薩によれば区画整備のため先祖の墓を掘り、この墓に行ったために周堂熬まづになったためという。この周堂熬は様々な所を巡るといわれ、特に祖先に関する場や、宴会の場に現れる。とりつかれて長い時間がたつと、人を殺すこともあり、死体を見るだけでも移るといわれる。これにとりつかれるのは四柱と関係があり、昔は葬儀の場でとりつかれると考えられ、その日の干支により何年生まれの人は葬儀を見ないようにというお触れをして禁止したという。実際今年の春に交通事故で妹が死亡するという不幸があったという。祭主の柳ソクシン氏（83歳）と妻のユン・イムさんは、結婚60周年を迎えるが、農業を営んできた。

- (29) オ・ムンソン 前掲書 p.36
- (30) 安相敬 前掲書 p.111
- (31) 安相敬 前掲書 p.111
- (32) 李圭昌 (1994) 「巫経考」『全羅民俗論攷』集文堂 1994 p.417
- (33) 安相敬 前掲書 p.176
- (34) この日は、大主（祭家の家長）李ハンゲン（57歳）さんの事業の成功と、祭主（祭家の女主人）ユ・ファン（54歳）さんの病気の治癒のために逐邪壇と、大主の姪（兄の娘）であるイ・スンオク（22歳）さんが3年前に自殺したが、同じく若くして自殺したキム・ジョンホさん（趙富元法師が以前から知っていた）との靈魂結婚を挙げ、亡者の無念を晴らし、極楽に薦度させるための靈駕極楽壇のふたつが準備された。
- (35) ‘殺’は悪い気運が入ったり、雑鬼にとりつかれ、厄運が迫っているなど、そうなり易い状況を示している。従ってそれを防ぐためには祭祀をすることで、厄運や凶事を防ぐことができる。（趙富元 談）
- (36) 岩井寛 (1986) 『色と形の深層心理』NHK ブックス 492 日本放送出版協会 pp.127~128
- (37) 岩井寛 前掲書 p.126
- (38) 城一夫 (1996) 『装飾文様の東と西』明現社 p.149
- (39) 『三国遺事』の鼻荊郎や處容郎の話からみられるように護符に対する信仰は新羅の時からあった鬼神の撃退法である。護符にはまた文字符と図符があり、文字符は天・日・鬼・弓・吉・口・王・神等の文字を単独又は組み合わせたものと、神名、人物名等を列ねたものがあり、図符は太陽形・顔面形・渦巻形・方形・搭形・天体形・手形・電光形等の輪廓形に文字を配したものであり、文字符、図符その何れも之に依って鬼神を退去させる意味を含めたものである。（村山智順 『朝鮮の鬼神』朝鮮総督府 1929.7

pp. 377~378)

- (40) 徐大錫 (1980) 「経巫考」『韓国巫歌の研究』文学思想社 p. 307
- (41) 中央は句陣騰蛇という天を飛ぶ蛇と、伝説上の聖君である黄帝を組み合わせたものである「中央戊己句陣騰蛇黄帝神将」を、やはり朱砂で書き貼り付ける。
- (42) 西方浄土である天竺と安宅を往来する神霊である。戸口という名称からして大門と関連した神霊であると推測される。(趙富元法師 談)
- (43) 中国の天文学・占星術で用いられている。
- (44) 車柱環 (1990)『朝鮮の道教』人文書院 pp. 76~76
- (45) 林永周 (1988)『韓国文様事典』河出書房新社 p. 76
- (46) 秋葉隆 (1980)『朝鮮民俗誌』名著出版 p. 128
- (47) 秋葉隆 (1980)『朝鮮民俗誌』名著出版 p. 130
- (48) 林永周 (1988)『韓国文様事典』河出書房新社 p. 46
- (49) 趙富元法師 談
- (50) イ・ピルヨン (1993)「大田の狂クッ」『大田文化』第2号 大田直轄市史編纂委員会 p. 284
- (51) 安相敬 前掲書 p. 36
- (52) 安相敬 前掲書 p. 42

(原稿受付 2018年11月28日)